

令和 6 年 5 月 19 日現在

機関番号：32413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02274

研究課題名(和文) 8050問題への視点の転換：中高年ひきこもりの家族機能と親に対する支援策の提言

研究課題名(英文) Shifting Perspectives on the 8050 Problem: Family Dynamics of Middle-Aged Hikikomori Individuals and Support Measures for Their Parents

研究代表者

山崎 幸子 (Yamazaki, Sachiko)

学校法人文京学院 文京学院大学・人間学部・教授

研究者番号：10550840

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中高年のひきこもり当事者や、支援員、地域高齢者を調査対象として、得られた結果から親に対する支援策を検討することを目的とした。面接調査から中高年のひきこもりは、老いへの自覚が再び社会につながる一因であることが見出された。量的調査から、中高年ひきこもりの出現率は4.4%であり、ひきこもりを抱える親は生活機能が低く、社会関係も狭小化しサポートが得られておらず、well-beingも低かった。また、男性は援助を求めない傾向にあった。女性は援助要請力が高いものの、家庭に関する問題は援助要請をしない傾向が確認された。これら得られた結果を元に、中高年ひきこもりを抱える親に対する支援策を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族全体が社会から孤立する中高年ひきこもり問題は、わが国における喫緊の課題である。

本研究では、地域高齢者における中高年ひきこもりの出現率を明らかにしたことに加え、老いの自覚という中年になったことそのものが転換期に入りやすいこと、一度は支援につながるも継続できていないことを確認した。また、親が早い段階から疲弊しサポートが得られておらず、さらに適切な援助要請ができていない傾向にあることを確認した。これらを元に、未だ相談機関につながっていない親への支援策を考案したものであり、課題解決に向け即時的に活用しうる、有益な知見が得られた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine support measures for parents based on the results obtained from a survey of middle-aged and older Hikikomori individuals, support workers, and older people in the community. We found from the interview survey that Hikikomori among middle-aged and older adults is caused by an awareness of old age, prompting them to rejoin society. A quantitative survey revealed that the incidence of Hikikomori among middle-aged and older adults was 4.4%. Parents of Hikikomori individuals had low life function, limited social relationships, lacked support, and had low well-being. Males tended not to seek help, while women, despite having a high ability to seek help, tended not to seek assistance for family problems. Based on these results, we examined support measures for parents of middle-aged and older Hikikomori individuals.

研究分野：老年心理学

キーワード：中高年ひきこもり 8050問題 援助要請

1. 研究開始当初の背景

中高年ひきこもりは、青年期からのひきこもり状態の継続もあるが、職場不適応、本人の病気、親の介護などの特徴があり、若者世代のひきこもり事由と質が異なっている。しかし、これまでの中高年ひきこもりに関する知見は事例研究が多く、疫学的な実証研究は見受けられない。8050問題の解決には、若者のひきこもりに関する知見を援用するのではなく、中高年ひきこもりの実態に即した支援方法を確立していくことが必要不可欠である。

ひきこもり問題は、その状態像からも本人に直接アクセスすることは容易ではない。そのため、まずは親への支援を通して本人の改善を図ることが重要で効果的である。しかし中高年ひきこもりを抱える親は若者世代の親とは異なり、生活に困窮するまで相談窓口を訪れないため相談機関等につながらず、家庭内で問題を抱えたまま社会から孤立している。ここには、中高年ひきこもりの親が、人に迷惑をかけたくないという規範が強い高齢者世代であり、他者へ援助を求めない傾向にあるためと考えられる。他者へ適切な援助を求める行動は、援助要請行動と呼ばれ「自力だけでは解決できない問題に直面した個人が、問題を解決しようと他者に援助を求めること」とされる。援助要請行動には、スティグマやアジア的価値の遵守などの心理的変数が影響するが、中高年ひきこもりの親は「高齢」という世代の影響から、様々な心理社会的要因により援助を求めず、そのため家族全体が社会的に孤立していると考えられ、これら要因の解明が支援策を検討する上で必須である。また、中高年ひきこもりに類似する閉じこもり高齢者(外出頻度が週1回未満)とその同居家族への調査では、家族の「良かれと思って」の関わりが本人の外出しない状態を発生・強化することが示されており、ひきこもり状態の維持においても親の日頃の関わりの影響が大きいと考えうる。しかしながら、現段階ではこのような要因に関する知見は極めて乏しい。

2. 研究の目的

本研究では、中高年のひきこもり当事者や、支援員、さらに親世代である高齢者を調査対象として、親の援助要請行動や本人に対する日頃の関わり等を明らかにし、得られた結果から親に対する支援策を検討することを目的とした。具体的には以下の通りである。

研究1は、中高年ひきこもりの支援に携わる専門職への面接調査を行い、支援を困難にする点やひきこもりが複雑化する要因、支援のポイントについて抽出した。研究2では、中高年ひきこもり経験者に面接調査を行い、長引くひきこもり状態から再び社会に繋がる経緯やその要因を明らかにした。研究3では、地域に潜在化している中高年ひきこもりを把握するため、地域高齢者を対象に調査を実施した。研究4では、地域高齢者を対象に、親の援助要請に関する課題について調査を実施した。最後に、これら研究1から4までの成果をもとに、中高年ひきこもりの親への支援策を考案した。

3. 研究の方法

1) 中高年ひきこもりの支援に携わる専門職への面接調査(研究1)

対象者: ひきこもり当事者や経験者への支援に携わる専門職2名

調査内容: 主な質問項目は、これまでに経験した中高年ひきこもり事例、支援の内容や工夫、困った点、支援を通じて感じたこと等であった。

手続き: 生活困窮者支援を実施しているNPO法人の支援員、療養相談室の相談員など中高年のひきこもり支援を経験している専門職者に対し、一人当たり60~90分程度の半構造化面接を実施した。インタビューで語られた内容は、協力者の合意を得てICレコーダーに録音し、後日、逐語録を作成した。

倫理的配慮: 調査対象者には、本研究の目的を説明し、調査で得られた個人情報等はすべて匿名化されること、同意が得られなかった場合も何ら不利益を被ることはないこと、得られたデータは厳重に保管され研究以外の目的では使用しないことについて文書を用いて説明し、文書にて同意を得た。本研究の実施にあたり、所属先の研究倫理審査委員会による承認を得て実施した。なお、本調査で療養相談室の相談員を調査対象とした理由は、療養が必要である高齢者に関する相談の背景に、中高年の独身の子どものひきこもりと思われる事例が見られることから、潜在的な8050問題を見出すためであった。

2) ひきこもり当事者へのインタビュー調査(研究2)

ひきこもり経験者を対象とした自助グループの参加者に対してインタビュー調査を実施し、その結果から支援の可能性や支援ポイントを抽出することを目的とした。

調査対象者: 自助グループAに所属するひきこもり経験者3名(男性2名、女性1名)

調査内容: 主な質問項目は、ひきこもり以前の生活、ひきこもりになったきっかけ、ひきこもり中の生活、ひきこもりから社会参加したきっかけ、現在の生活について、であった。

手続き：自助グループ A の代表者に本調査の趣旨を説明し、代表者から協力者を紹介してもらった。本調査に関する説明を実施し承諾が得られた 7 名に面接を実施した。一人当たり 60 分程度の半構造化面接を 2 回ずつ実施した。このうち、4 名は精神疾患による加療中であり、精神疾患の症状としてのひきこもり状態である可能性が認められたことから本分析からは除外した。インタビューで語られた内容は、協力者の合意を得て IC レコーダーに録音し、後日、逐語録を作成した。

倫理的配慮：対象者には、本研究の目的を説明し、調査で得られた個人情報等はすべて匿名化されること、同意が得られなかった場合も何ら不利益を被ることはないこと、得られたデータは厳重に保管され研究以外の目的では使用しないことについて文書を用いて説明し、文書にて同意を得た。本研究の実施にあたり、所属先の研究倫理審査委員会による承認を得て実施した。

分析方法：ひきこもり状態に対する親の援助要請や日頃の関わりについて、複線径路・等至性モデル (TEM) 等を用いて分析した。ひきこもりタイプ等を含めた研究 1 の結果と照合し、親に対する支援ポイントを抽出した。

3) 地域高齢者を対象とした潜在化している中高年ひきこもりの把握と親のメンタルヘルス(研究 3)

地域高齢者を対象とした調査により、ひきこもりを抱える家族の社会関係やメンタルヘルスの状態を明らかにすることを目的とした。

調査対象者：東京都 A 区在住の 65 歳以上の高齢者 4523 人

調査内容：同居家族のひきこもりを同定する項目として、「6 ヶ月以上自宅にひきこもっている同居者がいるか。ただし、コンビニなどへ外出していても、他者と交流する外出がない場合は該当する」を用いた。そのほか、人口統計学的変数に加えて、身体機能や高次の生活機能を測定する基本チェックリスト、困った時の相談相手など具体的なソーシャル・サポート、家族・親族、友人や近隣などとの交流や親密さを測定する測度として LSNS-6、well-being には WHO-5-J を用いた。

手続き：2022 年 12 月に、調査票を配布し 1237 人から回収した (回収率 27.3%)。ひきこもりに関する項目に欠損のあった者を除外し、最終的な分析対象は 1075 人であった。

倫理的配慮：調査の依頼状と共に調査票を郵送し、調査票への返送をもって本調査への協力に同意したとみなした。依頼状には、調査への協力は任意であること、協力しなくても不利益を被らないこと、無記名による回答のため個人が特定されることはないことなどを明記し、質問紙への回答をもって調査に同意したとみなすことも併記した。本研究の実施にあたっては、所属先の研究倫理審査委員会にて審査され、承認を得て実施した。

4) 地域高齢者を対象とした親の援助要請に関する調査(研究 4)

昨年度までに実施してきた、中高年ひきこもり当事者やその支援者らに対するインタビュー調査の結果から、家族側の援助要請に関する課題が、長引くひきこもりの一因になっていることが示された。そこで今年度は、中高年ひきこもりの親世代である地域高齢者を対象に、家庭の問題を主とした援助要請意図や行動に関する調査を行い、量的に検証することを目的とした。

調査対象者：埼玉県 A 市に在住の 65 歳から 84 歳までの高齢者から、住民基本台帳により 1000 人を無作為抽出し、自記式の郵送調査を実施した。その結果、583 人 (回収率 58.3%) から回答を得た。

調査内容：基本属性、同居家族、介護認定の有無と認定結果、援助要請希求や援助への抵抗感、悩み(家庭、健康、人間関係、生活全般)の頻度や度合い、それぞれの悩みに対する相談相手(行政などの公的機関を含む)、精神的健康度(WHO-5)、孤独感、ソーシャル・ネットワーク(LSNS-6)などであった。

手続き：調査期間は 2023 年 11 月 8 日から 11 月 26 日であり、回答は 583 人 (回収率 58.3%) から得た。このうち、宛先不明や入院・死亡、調査票の 4 割以上に欠損値があった者を除外し、最終的な分析対象者は 518 人であった。

倫理的配慮：調査の依頼状と共に調査票を郵送し、調査票への返送をもって本調査への協力に同意したとみなした。依頼状には、調査への協力は任意であること、協力しなくても不利益を被らないこと、無記名による回答のため個人が特定されることはないことなどを明記し、質問紙への回答をもって調査に同意したとみなすことも併記した。本研究の実施にあたっては、所属先の研究倫理審査委員会にて審査され、承認を得て実施した。

5) 中高年ひきこもりの親に対する支援策の考案

これまでの研究 1) ~ 4) で得られた成果をもとに、中高年ひきこもりの親に対する支援策を作成した。作成した支援策については、実施可能性と有用性について検討するため、ひきこもり支援に携わる相談援助従事者・専門職者 5 名に対する面接調査、およびフォーカスグループインタビューにより検討した。

4. 研究成果

1) 中高年ひきこもりの支援に携わる専門職への面接調査(研究1)

<結果と考察>

支援者らに対する面接調査から見出された,中高年ひきこもり支援における課題として,制度のはざまの対象であることが見出された。

中高年ひきこもり当事者が若いうちから,親が経済的に支えており,彼らの生活を守っているが,その一方で,当事者の社会とのつながりがますます薄くなり,家族全体が社会的な孤立状態に陥っている事例が多く,親が高齢となり認知症や要介護状態になる,あるいは,亡くなるといった局面までひきこもりが気づかれないケースが稀ではなかった。中高年ひきこもりは,保健所の管轄ではなく,また高齢者でもないため地域包括支援センターなどの福祉支援が利用できない。制度としては生活保護の管轄となる。しかし上述の通り,親が支援できていることにより生活保護に至らず,また支援を拒否する傾向にもあるため,ひきこもり状態に気づかれないまま年月が過ぎてしまい,問題が複雑化するまで把握できない。今回の調査では,司法制度と福祉制度のつながりに該当していると思われるケースの特徴として,長年,親の支援によってひきこもり生活が続き,生活スキルがなく,それによって窃盗などを繰り返しており,現行では司法制度を適用せざるを得ない仕組みになっており,制度の問題が見出された。また親も長いひきこもりの中で,一度は医療機関等に受診や相談しているケースが散見された。つまり早い段階で医療機関につながっても治療を継続していくことが難しく,親も本人の生活を支援し続けるしかない状態が続いている可能性がある。まさに8050問題は制度の狭間にあり,医療,福祉のいずれにおいても支援が届きにくい状態像であるといえる。

2) ひきこもり当事者へのインタビュー調査(研究2)

<結果と考察>

インタビューから事例の概要を記述し,8050問題の解決に向け,ひきこもり状態から再び社会とつながるまでの過程,示唆される課題を考察した。分析には複線径路等至性モデル(TEM)を用いた。分析の結果,対人不安がひきこもり生活に影響し,社会規範や家から外に出たい親の意向を受けつつも,外に出られない葛藤が認められた。この長いひきこもり生活において再び社会とつながるための意識の変容には,自分や親に対する老いの気づき,親から支援の限界を明言されるなど,中年期の課題が転機となって作用することが示された。当事者がこのような気づきを得た機会を取りこぼすことなくスムーズに支援が実施できるよう,支援者とのゆるやかな関係を継続し続けることが重要であると示唆された。

3) 地域高齢者を対象とした潜在化している中高年ひきこもりの把握と親のメンタルヘルス(研究3)

調査の結果,同居家族にひきこもり当事者がいたのは47人であった(ひきこもり出現率は4.4%)。ひきこもり該当者の年齢は40代が2(4.3%),50代が9(19.6%),60代以上が34(73.9%),無回答2名であった。ひきこもり期間は,1年未満が7(14.9%),2~5年が13(27.7%),3~6年が3(6.4%),10~15年が3(6.4%),16年以上が6(12.8%),無回答15であった。ひきこもりを抱える家族とそれ以外の家族の差異を検討した結果,ひきこもりを抱える家族は,生活機能が低く,高齢者のみの夫婦世帯が多かった。困ったことを相談できる人はいたが,体の具合が悪い時や寝込んだ時,日常の身の回りの世話や有用な情報をくれるなど,手段的なサポートがなく,サポート資源との親密性に乏しいことが示された。さらに,年齢,性別,身体機能を共変量とし,LSNS-6,WHO-5をそれぞれ従属変数とした共分散分析を実施した結果,LSNS-6は, $F(1,1055)=5.79, p=.016$,WHO-5-Jは, $F(1,1032)=8.81, p=.003$ であった。つまり,ひきこもりを抱える家族は,家族・親族や友人・近隣などの社会関係が狭小化しており,それに加えてwell-beingも低いことが示された。以上から,地域における潜在的な中高年ひきこもり家族の割合が把握できた。家族はサポート資源との親密性に乏しく,社会関係も小さくなっており,well-beingも低下していることが明らかとなった。

4) 地域高齢者を対象とした親の援助要請に関する調査(研究4)

分析の結果,対象者全体において,援助に対する抵抗感は先行研究よりも得点が低かった。性差を検討した結果,男性の方が援助を求めることに対する抵抗感が強く,家庭や生活など悩みごとの種類ではなく,悩みごと全体において援助要請行動を取らない傾向が示された。

女性は男性よりも援助を求めることに対する抵抗は少ないが,健康や人間関係,生活全般などの悩みと比して家庭に関する悩みは相談する意図や行動が少なく,相談する相手も限られることが確認された。ひきこもりをはじめとした家族に関する悩みごとを抱く高齢者は,自分の健康や生活などの悩みと比して他者に相談支援を求めにくい傾向が確認された。家族に関する適切な援助要請を促すためには,対象者を絞ることや行政など公的機関を含む相談しやすい場の提供,アクセス方法などを検討していくことが必要である。

5) 中高年ひきこもりの親に対する支援策の考察

研究1)~4)までの成果をもとに,中高年ひきこもり問題に対する親への支援策についてガ

イドラインを作成した。その際、すでに相談窓口を訪れている高齢の親を対象とした場合と、まだ相談窓口につながっていない、援助要請ができていない地域高齢者を対象とした場合において、それぞれ効果的なアプローチについて具体的な支援方法をフロー化し、さまざまな支援者が対応できるような形式をとった。作成した支援策案は、ひきこもり支援に携わる相談援助業務職員らに対する面接調査、およびフォーカル・グループインタビューによって、内容を実態に即した形で実施できるよう修正を図った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yamazaki S, Ura C, Shimmei M, Okam	4. 巻 36
2. 論文標題 In search of lost time: Long term prognosis of hikikomori called 8050 crisis	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Geriatric Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1590-1591
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/gps.5585	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamazaki S, Ura C, Okamura T	4. 巻 23
2. 論文標題 Time regained: awareness of not young anymore is a trigger for the ageing Hikikomori person to return to society	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Psychogeriatrics	6. 最初と最後の頁 730-731
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12977	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎幸子, 宇良千秋, 岡村毅	4. 巻 45
2. 論文標題 中高年ひきこもり者が再び社会とつながるまでの過程	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 213-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sachiko Yamazaki, Chiaki Ura, Hiroki Inagaki, Mika Sugiyama, Fumiko Miyamae, Ayako Edahiro, Kae Ito, Masanori Iwasaki, Hiroyuki Sasai, Tsuyoshi Okamura, Hirohiko Hirano, Shuichi Awata.	4. 巻 24
2. 論文標題 Social isolation and well being among families of middle aged and older hikikomori people	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Psychogeriatrics	6. 最初と最後の頁 145-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.13042	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山崎幸子, 宇良千秋, 岡村毅
2. 発表標題 中高年ひきこもり当事者が社会とつながるまでの過程
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山崎幸子
2. 発表標題 中高年ひきこもり事例からの孤立・困窮課題：三次予防の視点から
3. 学会等名 第87回日本心理学会大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡村 毅 (Okamura Tsuyoshi) (10463845)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究副部長 (82674)	
研究分担者	宇良 千秋 (Ura Chiaki) (60415495)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 (82674)	
研究分担者	新名 正弥 (Shinmei Masaya) (70312288)	田園調布学園大学・人間福祉学部・准教授 (32720)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------